

全国教材利用研究連絡会

於 東京・江東区文化センター

昭和60年 7月26 ~ 27日

全国教材利用研究大会

第2回

まとめ

記念講演

『楽しく 確かな授業とは』
と 問われて

東京大学 教授

吉 田 章 宏 先 生

この記録は 当日の御講演を 先生のご了解のもとに録音し、
事務局が書き起したものです。

第二回全国教材利用研究大会 記念講演

「楽しく確かな授業とは?と問われて」

講師 東京大学教授 吉田章宏

今日お話しするようと、「楽しく確かな授業とは」という題を与えられました。しかし、私は「楽しく確かな授業とは?と問われて」という題でお話し申し上げたいと思います。

瀬田先生によりますと、授業で、学習者にとっては楽しい授業を受けるということ、教師にとっては確かな手ごたえのある授業を实践するということが、このことが大事なことであり、これが楽しく確かな授業だ、という趣旨のようです。私はいろいろ考えたのですが、「楽しく確かな授業とは?と問われて」という題で話しをさせていただこうと思います。

この題で私が今まで考えてきたことを関連して申しますと、順に考えていくとすれば、一つには、授業とはどういうことなのか、それから、子どもにとって楽しい授業とはどういうことなのか、教師にとって確かな手ごたえのあるとはどういうことなのか、そして、そういうことをふまえて、楽しく確かな授業とは?と問われた時、私としてはどのようなことが考えられるか。結局、授業というのは、刻々その時々現在のものに生きるということだと私は考えているわけです。そういうことについて少しお話しして、そして時間のあるかぎり、具体的な事例についてコメントを加えながらお話しして、全体のまとめをするということにしたいと思います。

授業とはなんだろう。これは私自身が小学校などで、みなさんとおなじように、子どものときには授業を受けてきたわけです。私は学生時代が長かったものですから、そういう意味では、授業を受けてきた時間も長かったわけです。また私は教育について研究するということが授業ということを通して学んできました。初めは、かならずしも授業ということではなくて教える、とか学ぶ、ということを通して、70年頃から12~13年、斎藤喜博という先生のグループに加わって、授業について学び、そしてまた、その後もう一度、自分自身を確かめ、授業について考えるということをしてまいりました。そういう意味では、授業は与えられた題ではありますが、私にとっては、今までの研究の中心的な課題になってきたし、これからも追求していきたいと思っていることからなのです。

授業とはなにかと、問われた時、私、歴史の中でもいろいろな時期がありまして、心理学を学んだり、あるいは情報科学と呼ばれるような、現在では、認知心理学とか認知科学と呼ばれるようなものに親しんだり、それぞれの時期に、それぞれのものに親しんで、いろいろな考え方があるということを通して学んできたわけです。ここでご紹介はしませんが、例えば、アメリカで“Models of Teaching”「教えることのモデル」という本が出ているのですが、その本ではアメリカに20いくつかのグループがあって、

それぞれのグループが教え方について、「教えるということはいかようにあるか」という考えをそれぞれがまとめ、かつ具体的な教え方というものを、いろいろ考案している、ということが見られます。例えば「(教えるということはいかに)情報伝達、情報処理能力をつけることだ」という言い方をされることもあるし、「行動を変容させるのだ」ということを言われることもあるし、あるいは「それぞれの自己を発達させるのだ、開発するのだ、解放するのだ」というようなことを言われることもあるし、いろいろなグループがあり、いろいろな考え方があつたわけです。

私自身は、私自身の歴史からしぜんに、現在の自分の考えに至っているわけです。私は10年程前から、現象学というものを学ぶようになりました。これにはある必然性があつたわけなのですが、みなさんは、おそらくあまり現象学という名前に親しみをもっていられませんか。きっかけのお話だけを申し上げようと思いますが、神谷美恵子という精神医学の先生がいられちゃって、ごく最近お亡くなりになりました。広く読まれている本では、例えば、「生きがいについて」という本が、みずす書房から出されております。この話しも長くするつもりはありませんが、関心をお持ちになつたらぜひ読んでいただきたいと思つた本です。著作集がありまして、その本を私の大学で勧めましたら、たいへん感性にふれるところがあつて、私がたどつたのとちょうど同じように現象学に興味を持った、という学生さんがいられちゃいました。

先生方にとって、現象学といつたものはどうでもよいとして、もしこの本は、例えば、教師として生きるということの意味、子どもたちが本当に充実した生きがいを持って生きるということとは、どういふことなのだろうか、そうした生き方を子どもたちに可能にするには、教師としての自分はいかようにあるか、をしたらよいだろうか、というようなことを考えさせてくれる本ではないだろうかと思つた。私自身はこの本を読んで、いろいろなことを考えるようになり、授業について、また教師として生きること、研究者として生きることを考えるようになったわけです。ただ、今日はそういったことについてお話しするのが主題ではないので、授業についてのお話しに移っていきたく思います。

私の授業についての考え方は、ある時期に書いたものの中にあつて、今もだいたいそれでいいのではないかと、思つております。それについてお話ししながら、少しずつ説明していきたく思います。「授業は教材の世界と、教師の世界と、子どもたち一人一人の世界との、三つの緊張関係、対決と交流の中に成立する。教材の世界とは、基本的には科学、芸術の世界であり、それは科学者、芸術家の世界でもある。それはまた、より一般的には諸々の人間たちの世界でもある。また教材中に登場する、すなわち教材の世界に登場する人間たちの世界でもある。授業では教師の世界と、子どもたちの世界とが、教材の世界とそれぞれの出会いを媒介として出会う。教師の世界の中に、位置付けられた教材の世界と、子どもたちの世界の中に、位置付けられた教材の世界、そこに一つの物事についての多様な理解、解釈が生まれる。そして、その多様な理解、解釈を契機として互いの世界の出会い、対決と交流が生まれ、

緊張関係が生まれ、その結果として、教師と子どもたちそれぞれの世界が豊かになっていく。ここでいう出会いとは、自らの世界とは異なる世界、異質な世界との出会いである。その出会いは、一つの物事がそれぞれの世界において、異なった現われを示し、異なった意味を持つということを契機にして起こる。互いに異質な世界の出会いであるがゆえに、理解、解釈も時間の流れの中での対決と交流が生じ、衝突や葛藤が生じる。そこから、さらに新しい理解、解釈が生まれてくる。そのことを通じて、子どもたちがそれぞれの古い世界から、新しい世界へと移り行く、ということが起ってくる。それぞれの子どもの世界が、それとともに教師の世界も、また豊かに、新鮮になってくる。これが授業という仕事である。」少し省略しましたが、私の考え方はこのようなものです。

このような考え方に至るまでに、先ほどお話ししましたように、長い私自身の経過があるわけですが、それは省略します。重要な考え方の一つは、私たちは教師であるとか、あるいは、学校にきている子どもであるとか、そういうことの中に、もっと基本の前提として、一人一人の人間としてそれぞれが生きていて、これから一生、生きていくのだ、ということ。そして、それぞれの人がそれぞれの歴史なり、生きている世界というものを持っている。そういうことがあるのだということです。このことをついつい忘れがちになってしまって、役割と役割、つまり教師としての役割、学校にきている子どもとしての役割、その限りでのその人、というような限られた交わり、限られた関わりといったものに限定されてしまう。そういうことが起ることがちなのではないかと思うわけです。

授業の中で、例えば先生として、教師として教えること、ある決まったことがあり、それを、子どもはただそれを習得すればよい、これも一つの考え方でしょうし、それから教えることが決まっていて、なにしろ子どもに分りやすく教えられて、その子どもがそれをできるようになる。これが授業なんだ。それもそうだと思うのですが、しかし授業の中で起っていることはなにかということを考えますと、それだけのことではないということも、また無視できないことであると思うのです。実際に授業の中で起っていることを、全体の視野の中に入れながら、教師としてなにができるか、ということ考えた時に、授業の中で起っていることは、決して教師の意図したことだけではない、ということも一つ分かってきます。それとともに、どうしてそういうふうな意図したことだけではないことが起ってくるのかというと、一人一人の子どもがみんな違ひし、私も一人の人間として、また子どもたちとは違ひ世界を持っている。このことがその前提にあるということに気がつきます。

こうしたことは授業にとってはぜんぜん、関わりのないことだと考えている限りでは、そういうことについて考える必要はないわけですが、実は授業においても、そのことが極めて重要な意味をもってくる、ということがあると思うのです。そのことは、最も具体的にはなにかを学ぶときに、ある同じ物を見てもみんな違ひように考え、違ひように感じるということです。それではその違ひというのは、一体どこからくるのだろうか。先生としては気がつかないこともあるわけです。一人一人の子どもがどんな

ふうに違うようにとらえているかということに気がつかないことも、もちろんあります。それから気がついて、そのことを無視して、なんとかして教えようとか、できるようにしようとかいう努力をすることも、もちろんあります。しかしそういうふうにしたとしても、なおかつ、一人一人の子どもが違くとらえ方をし、それぞれの子どもらしいユニークな仕方でもって物事をとらえている。そういうことが起こっているということは否定することはできないわけです。

そうだとすると、むしろ授業について本当によくわかっていくためには、一人一人の子どもが違くとらえ方をし、にもかかわらず、ある仕方では先生の問題のとらえ方と触れあるところがあって、そして触れあ結果、あるいは子どもどうしが触れあ結果、お互いになんらかの新しい、これまでになかった問題のとらえ方、あるいはものの理解の仕方、ものの見え方というものが、授業を通してできあがってくる。そういうプロセス、そのプロセスをどのように、教師として、もう一度全体を見透しながら組織していくか。これが教師の仕事なんだ、それが授業なんだ、そう考えるわけなんです。

子ども一人一人が違うということ、このことについて話しだせば、それだけでできがなと思うのですが、例えばみなさんの則から考えてみますと、同窓会というものがあります。同窓会があって、集まって、かつての先生に教えられたこんなことというようなことを、いっしょに思い出して話しをするような時に、あの時、自分はこんなふうに受けとっていた、あの時、私はこのように受けとっていた、というように話しができた時に、お互いの受けとり方がどんなふうに違うかということに気がついて、ある距離をもっていますから、それが面白いと感じたり、おかしく感じたりするというようなことを経験されることは、よくあることだと思います。子どもの時には、そのことについては特に、自覚的にとらえているわけではないのですが、しかし、実際にはそういうことが起こっているわけです。あるいは、授業の中ではなくても、例えば先生について、ある先生についてどんな思いを持っているのか、というのがそれぞれ違う、ということももちろんあるわけです。

大事なことは、一人一人の子どもが、一人一人違うのだし、それぞれが背景を持っている、歴史を持っているということです。その背景というのは、その子どもがこれまでどんな育ち方をしてきたか、どんな家庭で育ってきたか、家庭の中ではどんな話しをしているか、あるいは兄弟がいるのか、いないのか、いろいろなことが数としてではなく、その子どもの具体的な生活として、それぞれ違うのだということ。そして、そのように違うことが最も具体的に現われてくるのは、あることをする時、例えば国語の作品を読んだり、数学の問題を解いてみるといった時、その時に考えることが一人一人違うということにおいてです。その違いというのは、それぞれの子どもの持っている世界の違い、ということもできるし、その子どもが持っている歴史の違い、ということもできるわけです。

生きている世界が違うということは、その人、一人一人の私というものが違うということだと思っております。次にお話しするのは、そのことと、教材というものについて考え方についてです。これも、私は

ある時期には、学問というものは、なにかできあがっているものだと考えていました。それは、おそらく試験がそういう考え方をさせたのだらうと思います。あるいは先生方の中にもそういう考え方をしている方が、おいでになるかもしれません。例えば、入学試験を受ける為には、ある教科書なり参考書に書いてあることを、なんとかして全部、ともかく憶えなければならないわけです。そこに書かれていることは、すべて確かなことで、それを憶えれば、それを習得したことが認定されるし、憶えなければ、それは認定されない。子どもたちにとっては、そういう性格を持ったものとして、学問は現われてきます。しかし、そういう固定的なもの、あるいは仕上がったものとしての学問という見方を克服していくが始まるのは、自分が学問を作るようになってからなのです。

どういふことかと申しますと、一つには、学問はそんなに確かなものではない、ということです。これは第一線で研究している、最も信頼のおける学者が知っていることです。例えば数学の場合でも、物理学の場合でもそうです。あるいは医学などというものは、ほとんどまだ学問の体を成していない、というようなことを、偉い医学の先生から伺ったりします。そうすると、今までの学問の見方というのは、どういふふうなことだったんだらうと、反省せざるをえなくなってくるわけです。よく考えてみると、学問というものも人間が作ったものであるわけです。ただ、一人の人間が作ったものではなくて、ある世代、ある時代の人があることを発見し、それを次の世代に伝えるということをしてきている。そして伝えられたものを、また確かめる人もでてくる。しかし、たとえば数学の論文で、確かでない論文もたくさんあるのだらうです。これは、ある数学者から聞いたことですが、世界中で数学の論文が何千、何万と発表されているわけですが、その中には間違いもたくさんあるということです。なぜならば、全部の人が全部確かめているのではないからです。そういうような柔らかな全体の組織の中で、学問というものが、少しずつ次の世代へと伝達されながら、大事なものがその中で選ばれながら、そして現在というものに至っている。もちろん教科書に書かれているようなことは、ほとんどの学者が同意することのできるようなものでしょうけれども、しかし、学問そのものは、決して固定的なものでもないのです。そもそも大事なことは、学問を作った人たちがいて、その作った人たちが確かめたり考えたりしたことなのだ、という基本的な点です。

そうだとすると、例えば、一体数学を習得するというのはどういふことなのだらうかという、数学を本当にわかった人と同じように、数学的な問題について考えることができるようになる、ということなわけです。形としては、教科書に数字として書かれていますが、数学を習得するということは、本当に書かれていることを、そのまま憶えるということではなく、そういうふうな数学を作った人たちと同じような考え方、同じようなもの見方、同じように筋道を立てた考えをすることができるようになる、ということなのです。つまり、そのことは学問の背景には人間が必ずいるということです。そして、それぞれのそういう人たちの世界があるということです。これは芸術についても同じことです。ある画

家のある絵を見る時、私はなにが絵を観るということかがよくわからなかった。ただ、絵を観るのだと思っていたわけです。ところが絵を観るのではない、といった哲学者がいます。絵を観るのではなくて、絵とともに観るのだ。絵とともに観るというのはどういうことかといえば、その絵を描いた芸術家が世界を見た。その世界の見方というものを、絵を観ることを通して我々は学ぶのだ。もちろんそれは絵を観るということでもあるのですが、しかし、絵を観ることだけに留まるわけではなくて、絵を観ることを通して、世界を見ることを学ぶ、世界を見ることを通して、芸術家と同じような世界を見ることを学ぶ、ということになるわけです。それと同時に、同じような世界を見るということが、つまり私自身が変わるということなのです。このような考え方に、私自身は至ったわけです。

教材の中にはいろいろな人が登場してきます。そのそれぞれの人の、それぞれの世界というものが描かれているわけですが、その世界というものを知り、かつ学ぶことを通して自分自身を広げていく、ということになります。この場合に、さらに教師というものが介在するわけで、教師はそういったことに理解を及ぼしながら、一つ一つの教材の中に表わされている世界がなんであるか、そしてひとが生きている世界というのは、どういうものであるか、ということを見通します。子どもがどのように、その教材の世界へ入っていくことを助けるのか、また、そのことを通して子どもの世界がどのように広がるのか、そのことを通して子ども自身の自我というものが、どのように豊かになっていくのか、ということが問題となるのです。そうした豊かさをもたらすのが授業であり、それぞれが世界に出会い、事件に出会いことを通じて、それぞれの自我、世界を変化させていく、こういうことが起こるのが授業だ、ということだと思っわけです。

くどくなるかもしれませんが申しますと、人間の一人一人の生きている世界などというものが、いっぺんに見えるということは、まずないわけです。私はここにおりますが、私がどんな世界に生きているかということ、を、どれほどの大勢の方がごらんになっても、いっぺんに見えるということはないわけです。しかし、見えることが起こるわけです。それはどういうことを通して起こるかといえば、たった一つのことについて、それぞれの人が違ったものにとらえ方を、ということを通して起こるわけです。これは、一つのものについて違った見方をするAさんとBさんがいます。このAさんとBさんが違った見方をするということはどういうことかという、AさんBさんの世界の中にあるものが、それぞれに位置付けられてみられている、ということなわけです。もう少し言葉を変えれば、あるものがAさんの世界の中では、違った文脈の中で、Aさんなりの文脈の中でとらえられていて、BさんはBさんで、Bさんの文脈の中でとらえるということがある、ということです。ということは、一つのものを見ても、そこにあるそのものだけを見るのではなくて、その背景にいろいろなことを関連付けて見ていく、その関連付け方が、それぞれに違うということ。それは先ほどから言っているような、それぞれの人の世界が違い、それぞれの人の歴史が違いということが、一つのことの見方を違うものとしている、という

ことなのです。

そうすると、授業の中で、大勢の子どもが集まっていて、そこで一つの教材について学ぶという時に、一人一人の子どもが違った読み方をする、違った見方をするということ自体が大変おもしろいことになってくるわけです。どうしてそんなことが起こるのだろうか、ということもおもしろいわけですし、そもそも、どのように違うかということ自体が、極めておもしろいことなわけです。さらに、授業の中でそうした違いを出発点にしながらも、ある一つの理解というものを、お互いに共通のものとして作っていく、ということが行なわれる。これも大変おもしろいことなのです。一つのクラスがあり、一人の先生と関わるということ、ある限られた時間でも、中学の場合ですと、一週間に一回とか二回ということになるかもしれませんが、一つ一つの授業を積み重ねていく中で、その時間、その先生との関わりの中で、できていく歴史というものがあるわけです。これは、例えば一つの教材について、大勢の子どもたちからいろいろな意見が出て、それが一つの考え方なり、あるいは、二つの考え方なりにまとまっていたとか、どうしても違う考え方が、その段階ではまとまらなかった、というようなことがあったとします。ともかく、そうしたできごとの共通の理解というものを一つ作ったということがあるとすると、それは子どもたちにとっても、教師としての私にとっても、一つの、ある時にいっしょに生きた時間というものを共有したということです。そのことが私にとっても、子どもにとっても一つの歴史となって、次の時間にはそのことが前提となって、また次の探究が始まる、ということがあるわけです。こうして、お互い同士、年の始めに会った時には、共通の世界というものが、どこにあるのか、またなにがあるか、ということがよく見えていなかったのが、何か月か経ち、そして一年経った時には、共通に学んできたことを通して、一つの歴史を共有したということに、先生と子どもたちになるわけです。

現象学の方で、経験の構造とか地平ということをいいます。地平という言葉は専門的には大変むずかしいことのようにですが、普通いわれていることで言えば、文脈とか背景ということだと、お考えいただければよいかと思います。地平というのは、もともと地平線の地平でして、例えば、ある所にいて見えることは、ある限られたものしか見えないわけですがけれども、屋上にいけば、さらに広くものが見えるわけですが、ただし、ある所にあるものは見えなくなる、というふうに、高い塔にどんどん登っていけば、広い地平のものが、ある距離をもって見えるようになる。地上に降りてくれば、狭い範囲のものが近く見える。どちらが広いからよい、とか狭いからよいということではなくて、見えるものがそれぞれに違うということです。

学習をしていくということは、地平が広がるということ、あるいは諸々の世界の多様な地平というものが融合するということです。

一般的に言えば、人と人とが出合い、つきあうということは、それぞれの地平の融合が起こることです。つまり、それぞれの人が、それぞれの歴史を持ちながら、ある一つのものについて、ある見

方をしている人と、もう一人の人が出合った時に、そのある具体的なことを通して、それぞれの歴史、それぞれの生きている世界、というものが、そこにあらわになりながら、それぞれの人があることについて、その背景としてそこに持ちだしてくるものが、こういうものだ、お互いに理解ができるようになる、ということです。そういうことを通して、そのものについての見方が変わってくる。これは、お互い同志が変わってくるということなのです。

そういう観点からすると、学 をしていくということは、どういうことかという、地平が広がって、多様な地平というのが見えてくるようになる。そして、それぞれの人の世界が豊かになるということです。豊かになるということは、一つの見方しかなかったのではないし、仮に一つの見方が深くなりするどくなる、しかもその見方、そのものについての自覚も生まれる、というようなことを指している。このように私は考えています。

少し先に進みますが、人間というのはなんだろう、と考えるわけです。これは神谷さんの「生きがいについて」を読んでも、そういうことについて考えさせられます。例えば生理学からいけば、確かに人間は筋肉の塊であり、あるいは神経系の塊であるかもしれない。さらに、もっと別な見方からすれば、蛋白質の集まりであるかもしれない。しかし教育について考える場合には、人間を人間としてとらえる、というとらえ方を、我々はすべきではないかと思えます。人間は他の動物と同じ側面というものも持っているわけですが、しかし、動物と同じように考えるべきではない。やはり、人間であることの独自性はなにか、ということを考えなければいけないのではないかと思えます。

諸々の世界とか、それぞれの世界の出会いとか、変化とか、地平の融合というようなことを、大変駆け足で申しましたが、そういう考え方の基本には、人間でなければ起こらないこと、一人一人の世界というものについての内容も、歴史の問題も、いろいろ問題はあるわけですが、子ども一人一人を人間としてとらえる、ということはどういうことなのか、という問題と関わっているのだ、ということで聞いていただきたいと思えます。

話しを急ぎますが、子どもにとって楽しい、こういう趣旨でしたが、子どもにとって楽しい授業、確かな授業といった時、それはこういうものだ、と言うことができるだろうか、こう考えると、今まで考えてきたことを前提とすれば、そういうことは言えないのだ、ということがはっきりしてくると思えます。つまり、その授業が子どもにとって楽しい、確かな授業か、ということが言えるかという、それは言えない、ということがはっきりしてくると思えます。なぜか？それは、あることを楽しいと思ったり、楽しくないと思ったりするということ、そのことに一人一人の違いがあるからなのです。例えば、こういうことがありました。私が授業について学んだ斎藤先生が、時々おっしゃっていたことですが、あるクラスで、いろいろな冗談を言って子どもたちを笑わせる先生がいた。そのクラスにはいつも笑い声が絶えなくて、大変楽しい良い授業だと、思っていた先生もいた。ところが斎藤先生は独自の方で、

自分の考えをズバッとおっしゃる方ですから「あんな授業をしてはいけない、子どもたちもそんな冗談にゲラゲラ笑ってはいけない、ただ笑っていれば、それで楽しいとか、良いとかいうものではない、ああいう冗談を言われたら、自分たちはバカにされたのだ、と怒るような子どもたちでなければいけない」というふうに言われていたわけです。そうすると、子どもたちが、ただ笑っていれば楽しい授業だということにはならないわけで、何について笑っているのか、あるいはどういう笑いなのか、どういう経験をして何を楽しんでいるのか、ということが問題となるわけです。ですから笑っていれば、楽しい授業であるというとはえ方はできない、ということがはっきりしてくると思います。つまり、子どもたちは何を楽しんでいるのか、あるいは、どういうことを楽しむような子どもたちに、今なっているのか、ということが問題です。そのことが、一言で言えば、先ほどお話ししたように、子どもたちが現在、生きている世界はどんな世界であるか、という問題になってくるわけです。

ここに、中勘助の「銀の匙」という本があります。これはぜひ読んでいただきたい本なのです。なぜかというと、私はある所に往んでいたのですが、その近所に小学校に行く子どもがおりました。その子が(小学校に)入った時、その学校の女の先生が入学後三日目くらいでしたか、その子を叩いてしまったのだそうです。その理由というのは、学校の規則を守るとか、ならびなさいと言えばならぶ、といったことができない、ぐずぐずしているといったことで、叩いてしまったらしいのです。そうしたら、その子が登校拒否を起こしてしまった、というようなことを聞きました。ちょうどこの「銀の匙」の中にも、その子に似たような、意気地がないといえは意気地がない、とても繊細な子どもが登場してくるのですが、幸せなことにおばあさんがいて、そのおばあさんが大変だいじにしてくれるものですから、登校拒否を起さなかったわけです。「銀の匙」には、一人の子どもが始めて学校にいった時の、不安に満ちた、恐れにも似た細やかな心の動き、学校にいったとたんに殴られたら、登校拒否を起こしてしまったのではないだろうか、と思われるような子どもの心の動きが描かれています。私はその近所のお子さんの話しを聞いた時、その子どもを叩いた先生は、「銀の匙」を読んでいないに違いない、と思ったのです。「銀の匙」は中勘助が書いたものですが、学校にいる一人一人の子どもは、「銀の匙」にあるような世界を持っているのだが、ただ書かないだけなのだ。そのように思うのです。

「銀の匙」の中でおもしろいところ、子どもといってもみんな違うということがわかるところを紹介します。主人公にはお兄さんがおりますが、そのお兄さんはかなり性格が違ってきます。つまり性格が違っているということは、人間が違うということで、これはどちらが良いということではなく、それぞれ違う世界に生きているということです。いっしょに釣りに行って帰ってくる場面で、このような会話があります。主人公が星を見ています。そうすると兄さんが

「なにをぐずぐずしてる」

という。はっと気がついて

「お星様をみてたんです」

というのをききもせず

「ばか。星っていえ」

とどなりつける。あわれな人よ。なにかの縁あって地獄の道づれとなったこの人を にいさんと呼ぶように、子供の憧憬が空をめぐる冷たい石を お星さん と呼ぶのがそんなに悪いことであつたらうか。

というような文章がでてきます。そのあと、また少しあいたところ、また釣りにつれていかれるのですが……

ある日のことまたそんなにして川のなかに立ってたとき私は足もとにあるまっ白な石を拾おうとして身がかがめた。それを兄はじきに見つけて

「なにする」

といった。

「石をひろうんです」

「ばか」

私はもういつものように恐れなかった。こないだから考えて考えて考えぬいてある。

「にいさん」

私は後ろからしずかに呼びかけた。

「にいさんが魚をとるのに僕はなぜ石をひろっちゃわるいんです」

兄は

「生意気いうな」

とどなりつけた。私は冷ややかに笑ってまともに兄の顔を見つめながら

「僕のいうことがちがってるなら教えてください」

兄は

「なぐるぞ」

といって手をあげた。私は黙ってたれさがった枝のさきにびくをかけ、崖をあがって帰りかけたが、うす暗い木の陰にこごんでいるのを見ると急に気の毒になり、あんなにいうけれどきつとやっばし寂しいんだらうとおもって岸のうえから一所懸命によんだ。

「にいさん、にいさん、いてあげましょうか」

兄は知らん顔して網をそろえている。

「さようなら」

私は丁寧に帽子をとってひとりで家へ帰った。それからは私たちは決していっしょに出かけ

なかった。

このような記述があるのですが、中勤助が自分の子ども時代を文学化して描いているわけです。大人からみれば、ほとんど二人とも子どもだということだけに留まるかもしれませんが、それぞれが生きている世界というものが極めて違うのだということ、そもそも違うか違わないかというのを超えて、こういうようなことを感じたり、考えたりしていることが、子どもにありうるのだという可能性を、描いてくれている作品として、先生方にはぜひ読んでいただきたいと思います。

一人一人の子どもが、それぞれ違う世界に生きているとすれば、当然、なにを楽しいかと思うかということも、それぞれに違うわけです。また、これもおもしろい文章なので紹介します。小学校二年生が、一年の夏休みの時に書いた日記の文章です。

一ねんくみのところで、きれいな石をみつけました。そして、あらいました。そして、あさってに、たらいにぬるいおゆをいれて、石のからどもあらいました。ほくのあしもあらいました。その石をもってがっこうにいったら、よその人がきていました。てっほりやら、かいせんとうを、じぶんでまわしてあそびました。

石はひとりほっちではない。」

子どもが、大人の目には何の値うちもないような品物を珍重したり、愛蔵したりすることは普通のことだが、きれいというのは、決して大人のきれいではない。子どものそれはおもしろいという意味でも、かわいいという意味でも、気に入ったという意味でもあるらしく、しばしば、きたないものがきれいになる。石の体と、ほくの足とがごっちゃになっているところは、正に子どもの文章である。先生は「石をだいにしたんだね」と寸評を書いているのだが、ただ石をだいにしたということだけではない。子どもと物のつきあい方には、まったく徹底していることがわかる。石を拾ってきて、自分の体といっしょにあらってやり、運動場へつれて行って遊んでやったのだから、石はもう一人ほっちではない。こうした物とのつきあい方、これは大人はしない。

大人の言葉では、石をだいにしたんだね、ということになるかもしれないが、子どもはそれ以上のことをやっているのだから、したがって、石をだいにしたんだね、ということだけでは、先生は子どもの生きている世界というものを、本当にわかったことにはならないわけです。確かに、大人の言葉で言えば、石をだいにしたんだね、ということなのです。むしろ石とよくつきあったんだねというか、本当に石と仲よくなったんだね、ということのはずなのです。

そのようなことを考えて、子どもの生きている世界の不思議さとか、豊かさといったもの、そういう世界に思いを向けると、子どもにとって楽しいというのは、子どもがどのような世界に生きているか、ということによっていろいろ変わってくる、ということだと思います。子どもが人間であるということから、実は、子どもが今、何を楽しいとするかということとは、これまで子どもが何を楽しいとしてきた

かということ、あるいは、これから何を楽しむという方向に向っているかということ、そういったことが背景となりながら、今何を楽しいとしているか、何を楽しいとしつつあるか、ということだと思いのです。つまり、時の流れの中で、子どもは子どもの世界を、現在を生きている。しかし、その地平は刻々に変化しつつあるわけで、私たちにとってその子どもの地平というものが、すべて明らかになるということはありませんが、しかしある特定の内容、特定の事柄について、その子どもが何を考え、何を楽しいとするか、というようなことはわかるうとすれば、わかることもできる場合がある。ともかく我々は、大人である教師としては（子どもとは）異なる世界に生きているということ、そして子どもが何を楽しいとするかということについても、異なるのだということに自覚した上で、その異なる世界というものを理解しよう、わかるうという心に向けていかなければならないのではないかと思います。

授業で子どもがしたいにその世界を広げ、深め、豊かにし、大人の世界に近づいていくということも、ある場合にはする。また、子ども独自の世界をさらに豊かにしていくということもある。そうしたことから、実は子どもの世界を知ることによって、大人である教師の世界も、また子どもの世界を発見し、豊かになっていくということがある。そういうことだと思います。これは、例えば中勘助の「銀の匙」を読んで、我々がただ子どもはどのように生きているのか、ということを知ったということだけではなく、実は人間がどのような世界を生きることができるか、ということについて一つ知ることになるわけでそうしたことを通して、我々自身が豊かになっていくということがある。そのことは生きた子どもたちと接する先生たちの一人一人の世界が、豊かになっていくということです。つまり子どもの世界に目を向ける先生は、実は先生自身も豊かになっていくのだ。そういうことがあるように思います。

そのような考え方をすると、教師にとっての手ごたえの確かさというの、またこれも一人一人の先生にとって多様な意味を持ちうるのだ、ということになってくるのではないかと思います。つまり、一人一人の先生がどのような世界に生きているかということ、これは先生によってそれぞれ違うわけです。何を手ごたえが確かだと思いかということもそうです。実は、これが手ごたえの確かな授業だと、自分が感じた時に、それは現在においてはそうなのだけれども、私は変わっていくかもしれない、変わっていった時には、あのようなことを手ごたえの確かなことだと思っていたこと自体が、教師として、また子どもをわかる人間として、決して豊かな世界に生きてはいなかったのだ、ということがわかってくるという場合もありうると思います。逆に、ある時には手ごたえが確かだ、だいたいなことだとは思えなかったことが、実は極めてだいたいなことだと思えるようになってくる、という変化が自分に起こってくる。そのようなこともありうると思うのです。このことは、子どもたちがあることについて楽しいと思う、楽しみを感じるということが、その時々子ども一人一人において違うのと同じように、先生一人一人において、授業をしながら確かさを感じる、その感じ方、あるいは感じるもの、何を手ごたえが確かだと感じるかということが違うということだと思います。それで実は、その違いというのは何を表わして

いるかといえば、一人一人が生きている世界というものを表わしている、ないしはそれぞれの先生の生きてきた歴史というものを表わしている、ということになるだろうと思います。もちろん子どもの場合と同じように、それぞれの先生の生きている歴史というもの、世界というものも、これから積み重ねられていくわけですし、刻々に変化していくという可能性を持っている、ということだと思のです。

それから、先ほど申しました一つ一つの教材についても、同じことが言えるわけで、例えば数学でもなんでもそうですが、研究者の一人一人の生活というものをとってみると、20歳の頃におもしろいと思っていたことが、あるいは、これが確かだと思っていたことが、研究を続けた結果それを否定するということは、研究を本気にとりこんでいる人であれば、そういうことが起こるのは、ごく当たりまえなことなわけです。そうであるとすると、こういうことは避けられないと思うのです。つまりある世界に生きている子どもたち、それからある世界に生きている教師というものが、現在というその時の先生の状態において、その時の子どもたちの状態において、ある一時間を共有するという時に、もし違う時に出会ったとすれば、違う出会い方があったかもしれない、しかしこの時にはこういう出会い方しかできない、というそういう出会い方をしているのだ、ということになると思うのです。これは教材解釈というよりなことについてもそうです。一回目にその教材を使った時には、こういう教材解釈しかできなかったが、何年かしたらもっといろいろな教材解釈ができるようになるということは、当りまえのことなのです。そうではなくて、一回目に扱ったのと同じことを、10年後にもやっているという先生は、なんの成長も、先生としては、なかったということになるわけです。ですから、一つの教材についての多様な解釈というものは、その先生がその時に頭を振り絞って考えた、それも一つの教材解釈でしょうし、その教材についていくつかの授業をやった、その時に子どもたちから本当に自由にいろいろな意見がでてきた、その意見の背景にある、子どもたちの一人一人の生きている世界というものがだんだん見えるようになってきた、そういうことを通してその教材について、このような解釈がありうるということ、先生が学んでいけば、その次の時その次の時と、しだいに先生自身のその教材に対する解釈の仕方、少なくとも子どもはどのようにその教材を解釈するか、あるいはどのように誤解するのか、それぞれの子どもがどのような見方をするのかということについて、最初の時よりはずっと豊かな、いろいろな多様な解釈ができるようになっていく。しかも諸々の解釈の間の相互の関係ということについても多様な理解、豊かな理解というものができるようになる。そういうことが当然、起こっていくはずで、これは、先生の世界がしだいに豊かになっていくということ。そこにまた、教材解釈の中にその先生一人一人の世界が表われてくるということでもあるわけです。

手ごたえということで、極めて俗なことを申します。研究授業などがあって、参観者が大勢きていて、その参観者たちが「大変すばらしかった」と言ったとする。問題はそのように言い時、何を基準としてすばらしいのかということ。例えば子どもたちが非常に活発で、手をよくあげ、答えも極め

てははっきりとした口調で発表していて大変すばらしい授業だった、というような観点で評価されるというのを、先生たちが感じると、研究授業の時に次のようなことが起こりうるわけです。これは私も、そういうことはありうることだし、事実としてあるのだということを知っていたのですが、大学で学生さんたちが授業研究ということについて、メモにも書いてくれたのです。それはこういうことなのです。子どもたちと先生が打ち合わせをしておいて、研究授業をやる時の教材について、前もって一回やっておく、それで、どこについては誰にあてるとかいうことを決めておいて、研究授業の時には、言わば「お芝居」をやる。そういうことをされたことがあるので、自分は研究授業というのをまったく信用しない。このように書いている学生さんが何人もでてくるのです。どうしてそのようなことをするのだろうかと考え、よっぱど授業研究ということが、先生のプレッシャーになっている場というのがあるのだなと感じるのです。先生の目は決して子どもに向っているのではなくて、授業をしながら周りにいる先生たちに向っています。その先生たちによく見えるように、ここで何をやるかということにだけに目が向いているわけです。そういう俗な授業研究というのものもあるわけです。こういうものを、手ごたえがあると言ってはならないわけですが、しかしその先生はそういう授業を手ごたえがあると思っているかもしれないのです。ということは、その先生が少なくとも研究授業なり参観授業というものについては、そういう世界に生きているということではないかと思えます。

一人一人の世界の変化、成長ということを考えると、こういうことになるかと思えます。授業の中で現在、一人一人の子どもが生きている世界というものをだいにすること、これは言うまでもないことです。しかしその中で、それに対して今までとは違った世界が開示されて、そして子どもがその新しい世界に移り住むということは授業でしかできないことなわけです。それは、教師が媒介して初めて子どもにもたらされる新しい世界、というものがあるということです。例えば、子どもが楽しいということと考えた場合、子どもが楽しいということは、子どもの興味のあることを学ぶことなのだ、とよくいわれます。その通りなのですが、子どもが興味をもっている現在のことだけを重視したならば、子どもの世界が広がるということが、遅らされてしまう場合も起こりうるわけです。つまり子どもが現在は興味を持たないことであっても、その問題に接することによって、子どもの世界が広がり、興味が広がってくる、ということもまた起こらなければならないわけです。授業では子どもの興味をだいにすること、子どもにとって楽しい授業になる、これも一面ではありますが、しかし現在の、今子どもが生きている世界で、興味を持たれている事柄だけに、もし授業が限定されるならば、それは少し狭すぎる見方ではないか、そのような考え方も可能になってくるかと思えます。

私たちは日常的な生活の中で、ともかく慣れ親しんだ世界というものを持っているわけです。ここは決して先生方一人一人にとって、慣れ親しんだ世界ではないと思えます。自分の学校の自分の教室は慣れ親しんだ世界だと思えます。言ってみると、わざわざここに出ているのは、慣れ親しんだ世

界から出て、ある違う世界に接しようという希望をもって出ていらっしゃっているのだと思います。そのことによって自分の世界が広がるということでしょう。そういうことが人間が生きていく中で、起こることによって世界が広がっていくのだ。そのような考え方が授業についてもいえるわけです。

ある小学校の子どもが、次のような言葉を書いているので紹介します。

私たちの普通の生活と歌や詩の世界との間には向こう側が見えない板のようなものがある。

その板には小さな穴があいていて、歌や詩の世界に行けるようになっているが、努力しない人にはその穴はみつからない。努力してその穴を見つけ、何度もその穴を行ったり来たりしているうちに穴は大きくなり、楽に通れるようになってくる。そして私たちも豊かになっていくのだ。私たちも先生に導かれながら、みえないこの穴をさがし、求め、くぐりぬけ、私たちの知らない世界に触れ、驚きと喜びに浸ったことが何度もありました。

これは六年生の子どもが、卒業する時にお別れの言葉でいったことですが、子どもの把握としては、私(5)がめんどうな言葉で、世界とか、地平の拡大とか、深化とか、あるいは異化といった言葉で説明するよりも、わかりやすくとらえていると思います。

異化という言葉ですが、異化というのはロシアンフォルマリズムの言葉のようで、大江健三郎さんが「小説の方法」という本の中で、中心的な概念としてとりあげています。あるいは映画の話していうと、ベラバラージュの「映画の理論」の中にボードレールの言葉として、このような考え方ができます。この考え方は、日常的に毎日慣れしんでいる世界に埋没してしまっていて、あるものを新しくみるということができないという状態それをまったく違う見方からみることで、いわば目の鱗がとれて、新鮮な気持ちで新しくそのものをみることができるといことです。そういうことを重ね重ねていく中で、人間はだんだん豊かになっていくのだ。諸々の教科、数学でも、理科でも、英語でも、国語でも何でも、それからそれぞれの教科の一つ一つの教材が、実は子ども一人一人を豊かにしていく、つまり世界を豊かにしていく。世界を豊かにしていくということは、たった一つの、ものについての見方がしだいに多面的になりながら、全体としてお互に関連し合った、しかも多様な見方というものができるようになるということです。こういうことを目指して、授業というものが行なわれるのだ。そのことは別な言い方をすれば、他の人の世界がわかるようになるということですから、他の人と話しをした時に、お互い同志、違うということがわかりながら、その人の世界に興味を持つことができる、あるものについてのその人の見方から学ぶことを通して、自分の見方が豊かになっていくというようなことができる子どもになっていく、ということである。そのように考えます。世界の諸々の移り行きといったことについては、一番手ごろに読むことができるのは、大江さんの「小説の方法」で、これを読んでいただければ、(6) どういうことなのかある程度、感じとっていただけるかと思います。

授業とはという元の問題に戻ります。楽しく、手ごたえのある授業ということですが、一人一人の子

どもにとっての楽しさというものが違い、一人一人の先生にとって、あるいは私にとっても、その時々によって何を手ごたえがあると感じるか違うということになると、大事なことは、どういう授業が楽しい授業、手ごたえのある授業かということについて考えること、これも大事なことです、それだけではなくて、どういうことを楽しむような子どもになっているか、どういう授業を手ごたえがあると感じるように自分になっているか、ということがもっと大事です。このことは、私と子どもとが一つの教室の中でいっしょに生きているわけですが、その教室全体に生きている人間たちの一人一人の世界がどのような世界であるか、どのような世界になりつつあるか、変化してきているか、ということが大事だということです。

それから現在というものが極めて大事なのだということです。つまり、明日はまたお互いに違っているかもしれないですね。いつもこうやれば充実し、楽しいといった固定的なことは、一方ではそういうことがあってほしいと思うし、そういうものを求めてもいいと思います、しかし現実にはそういう固定的なことだけで押し通そうとしてもそうはいかない、ということなのです。

それから、準備すればいいか、徹底的に準備すればそれでいいかという、そうではない。徹底的に準備した授業の例というものを一つ持っています。徹底的に準備しても、現在というものを充実して生きなければ、授業は失敗するということがあるのです。「文学の授業」という武田常夫先生がお書きになった本がありますが、その中に「走れメロス」という教材を扱った授業⁽⁷⁾の案があります。これは短い節を、何十ページもかけて分析しており、授業における教材研究の例としては、私はすばらしいものだと思います。その教材研究の仕方そのものが、実は現象学の考え方と非常に沿っているところがあるわけです。つまりそこで登場する一人一人の人物が生きている世界というものを、細かく見ていくというを教えてくれる一つの例としてお勧めしたいものです。しかし実際の授業は失敗するのです。つまりいくら周到に準備しても、周到に準備すればするほど先がみえたように思って、現在のその時の充実というものができなくなってしまい、現在に生きるということがむずかしくなってしまう、ということがありうるわけです。これは日常的な生活でいえば、こういうことがあると思います。とっさに本気で何かを言っている時に、一番充実感があるわけです。しかし、こういうふうに言おうと思って、考えに考えて、用意してきて、その通りに、言葉をまちがえないように言おうとすると自分の気持ちが全面的には入りきれない、ないしは入らないということがありますね。例えば、俳優さんであればただシナリオなり台詞を憶えたというだけではまたたりないわけで、いったん全部憶えてしまってから、そしてそれを忘れて、その場でその時に相手に対して対応するように、その時の人物になって言った時に、始めて演技として生きるわけです。全部準備がしてあって、この次はこれがでてくる、その次にこれがでてくるということだけに頭がいってれば、現在というものを充実して生きることはできないわけです。ということは、どういうことかという、周到な準備をすれば良いということではない、周到な準備をする

ことは大事なことです、しかし、その先にあるのは準備をしたあとでそれを忘れる、そして現在そのものを充実して生きるということ、そういうことが授業には必要なのだ、ということになるかと思いません。

それから、教師にとっての手ごたえには、子どもが現在どのような世界を生きているか、子どもがどのように変わってきているか、そのことをじかに感じることで充実感を覚え、手ごたえが確かだと感じる、ということがあると思います。

授業については展開といったことがあります、展開ということを用いる時、よく起承転結というようにものをいいます。起承転結というのは、私の解釈では、起から承までのところが読み手にとっては一つの新しい世界の中に入る、転でもってもう一つの新しい世界というものが提示され、結でもってその二つの世界の両方が、全体がみえるような世界に入る、そのことによって一つの詩を読むことを通して、新しいいわば二つの世界が統合されたようなもう一つの世界が開示される、そのようなことだと思います。

そうなること極めて大事なことは、自分が予想もしなかったことを子どもが言った時、それが何を意味しているのか、つまり子どものどういう世界からそのことが出てきたのかということに、思いをはせることができるかどうかということです。それは教師にとっては、大変な柔軟さを要求されることになるわけです。つまり子どもはただ、おもしろいとか、つまらないとか、簡単なことしか言わないかもしれません。しかしその言葉、ないしはあることについて、あることを言った時に、そのことが一体何を意味しているのかということがわかるようになります。そういうことが教師に要求されるわけです。それで一つの例ですが、このようなものがあります。「五ひきの鹿」という国語の教材で……

王様は自分も行ってみたいになりました。そこで、男に案内させて、鹿狩りをする⁽⁸⁾ことにしました。狩人をつれた王様の行列は、京からおくやまへ向って進んでいきました。

話の前後は省略しますが、そういう教材です。これをあるクラスで、先生がこのような授業をしていました。

「王様がどんな気持でおくやまへ行ったのでしょーう」という教師の発問に促されて、次々に発言する子どもたちの中に、「ねえ、先生、王様は何人」ときく子がいた。一番前の席にいる小柄な男の子から発せられた質問である。しかしその声は、発言を求める他の多くの子の声に掻き消されて、教師の耳にはとどかなかったようにみえた。私(私とは観察している人ですが)は一瞬、この子の言いたいことは何なのだろうと考えた。そして私ははっとした。その子は友だちの発言のあい間をぬって、再び叫んだ。「ねえ、先生、王様に何人いるの」先生は一瞬とまどったようにその子を見た。しかし先生はその子の発言の意味が理解できなかった、理解しようとする姿勢も示さなかった。時間も迫っている。ようやくまとまりかけた最後の課題の追求の最中に、そんなわけのわからない質問にかかわっている暇はないと

思ったのだろう。男の子の発言は私（観察者ですが）にとっては、思いがけない一つの事件であった。しかしその先生にとっては、泡のように瑣末な現象としか映らなかったのであろう。授業は終わった。もう一度、本文を読んでみますが……

王様は自分も行ってみたいくなりました。そこで、男に案内させて、鹿狩りをすることにしました。狩人をつれた王様の行列は、京からおくやまへ向って進んでいきました。

三年生のある男の子が「王様は何人いるの」ときいたわけです。でも、大勢の先生が見ているわけですし、授業はまともに向っていたわけです。それが、変な質問をする子どもがいるというわけで、始めは、知らん顔をしていたのだけれど、もう一度叫ぶので、しかたがないから、そちらを見たのだけれど、でもとり上げたのではあとがどうなるかわからないということで、授業は終わってしまったというわけです。

それはこういうことなのです。

子どもたちは一学期の頃、同じ教科書で「ありの行列」という説明的文章を習っているはずである。そこで、ありの行列とはたくさんのありが、行列を作って一本の線のように連なっている様子をいうのだと教わったはずだし、挿絵によって視覚的にもその様子をはっきりとイメージ化しているはずである。ありの行戻が、数えきれないほどの多くのありによって、作り出された一つの秩序をもった状態であるならば、王様の行列もまた大勢の王様が、一列にならんでおくやまへ踏み込んでいく状態と考えてわるいわけではない。でも王様がありのように無数にいるとも思われぬ。一体、王様は何人いるのか。私は「王様は何人いるの」としきりに尋ねる子どもの発言の意味を、そんなふうに読みとった。そして、そのことがはっきりしない以上、この子には狩人をつれて、おくやまへ向う王様の心を追求する学習に参加するゆとりなど、ほとんどなかったのではないかと私は思ったのである。

このようなことは、学校の授業の中でよくあることだと思うのです。特にできないほうの子どもほど、普通の子どもが考えないような、突拍子もない質問をすることがあると思います。できないので、研究授業などではなおのこと、変な質問をされると困りますし、先生はせっかくいろいろなことを用意してあるのに、とんでもない方へ行く恐れがあるので、つい見すごされてしまい、というようなことも起こりがちだと思うのです。しかし、いわれるできない子どもほど、おもしろい独自の世界に生きているわけで、したがっておもしろい問題を提示してくれるわけです。王様の行列というのと、ありの行列というのと、「の」というのが同じ「の」なのに、どこが違うのだろうか、というようなことも問題になるはずですし、そうしたことから、つきなみに王様の心を問題にするよりは、ずっと深い国語の勉強ができたかもしれないわけです。そのようなことを考えます。

終わりの方にいきますが、確かな手ごたえという時に、丁寧に教えるということをお考えになる先生がいらっしゃるかもしれません。これらとても大事なことなのですが、しかし、丁寧に教えるというこ

とは、実はある限界があるわけです。もし、子どもはこういうことを考えているに違いない、こういうことがわからないに違いない、というようなこちらの子どもについて理解、すでにできあがった、ないしは予想された理解というものを前提にして、丁寧に教えている限り、実は子どもがわからないところ、ないしは子どもが本当にはどういうわかり方をしているのかといった、そのわかり方に向ってつき進んでいく丁寧な教え方にはならないわけです。ですから、先ほど紹介した武田先生は、教えるということには教えたいと思うことを、惜しんで、惜しんで、惜しみぬくことだ、という言葉を書いているらしいんですが、惜しんで、惜しんで、惜しみぬくことで、子どもがそれを学びたいと思うようになるのが、本当に子どもが楽しむということであって、そのように子どもから進んで学ぶようになるという時に、一つの手ごたえの確かさというものを、感じることが、授業の中でできるのではないかと思います。ですから教えるということは、教えないことだということも、丁寧に教えることだということと並んで、考えておくべきことだと思います。

楽しく確かな授業というのは、大変良いねらいだとは思いますが、しかしその内実について考えると、子どもたち、そして先生方が変わっていくにしたがって、楽しいとか、確かだということも、しだいに変わっていくと思われそうですし、また変わらなければならぬのではないかと思います。

授業ということについて少し越びをしてみたいのですが、「授業」ってどう考えますか。先ほどまじめにお話したのが私の考え方なのですが、ある友人が、授業というのは「じゅぎょう」というふうに読むのではなくて、「じゅごう」というふうに読むんだとっております。人間に業を授けるのが「授業」であるというわけです。それでは「業」というのは何かと漢和辞典で調べてみると、「善悪の報いの縁となる行為」。つまり業因の報い、業によってつける善悪の報い、つまり授業の中で子どもたちは業を授けられて、そしてその業によって、学校を卒業してからいろいろな報いを受けるわけです。先生は子どもたちに業を授けているわけです。業というと悪い方の意味が使われることが多いようですが、悪い意味だけではなくて、善の方も業というようです。そうだとすると、授業というのは先生が、子どもたちがこれから生きていく前の業を授けることであり、そこで受けた業によって、子どもたちは世の中に出ていって報いを受けるのだ。授業については、このような見方もありうると思うのです。

もう一つ気がついたことを申しますと、楽しく確かな授業ということについて、先ほどは瀬田先生がお書きになっている考え方にしたがって、お話をしたのですが、しばらく考えているうちに、このようなことも考えられるかな、と考え始めたのです。一つは先ほどお話したように、子どもが楽しみ、教師が確かな手ごたえを感じる授業 ということですけれども、あるいは子どもが確かに育ち、そのことを教師が楽しむ授業というのも、楽しく確かな授業ということになるかもしれませんし、もう一つ言いかえれば、子どもも、教師も共に確かに育つということを楽しむ、そのことを通して善悪の報いの縁となる行為を授け、授かる、それも楽しく確かな授業になるかなとも思ったりしました。

芦田恵之助という方の言葉に、共に育ちましようという言葉があって、教育というのは共に育つということなのだ、教え育てるということだけれども、それと同時に共に育つということなのだ、という考え方が出されています。共に育つという意味の共育という言葉は、今は比較的広く使われるようになっているようです。確かに、一人一人の子どもを理解し、そしてその子どもたちが変わっていく、成長していく、育っていくということを、その現場で立ち合い、そのことを促すという仕事をするを通して、先生自身が豊かにならないはずがないですね。先生が豊かにならないということは、実は子どもが育っていないということだと思っております。ですから、先生が育っていくということは、結局は子どもが育つということになるのだし、子どもが育っていくことを促す仕事を先生がされれば、当然先生も豊かになっていくということなのだと思えます。いろいろお話したいことも残ってしまいましたが、私が考えていることは、だいたいこのようなところですよ。

- 1) Bruce Joyce & Marsha Weil: Models of Teaching, Prentice Hall, 1980.
- 2) 神谷美恵子 「生きがいについて」 みすず書房 1980年
- 3) 吉田章宏編著 「授業」 朝倉書店 1983年
- 4) 中 勘助 「銀の匙」 岩波文庫
- 5) 斎藤喜博 「教育学のすすめ」 筑摩書房 1969年
- 6) 大江健三郎 「小説の方法」 岩波書店 1978年
- 7) 武田常夫 「文学の授業」 明治図書 1964年
- 8) 武田常夫 「授業の中の子ども」 明治図書 1980年

第2回 全国教材利用研究大会 まとめ

昭和60年 7月26~27日

発行 全国教材利用研究会 事務局

東京都港区虎ノ門1~17~1

(財)日本視聴覚教育協会 内